

編集後記

『国際経営フォーラム』No.28は、前号に引き続き多数の論考を掲載し無事に刊行することができた。玉稿をお寄せいただいた先生方に、また、うち1本を査読いただいた先生に、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

さて、この年末は天皇譲位の決定が世間の注目を集めている。月初に皇室会議が開かれ、再来年4月30日をもって今上天皇は上皇に退き、徳仁親王が後を継ぐことが決定した。振り返ってみると、皇后と連れだって被災地を見舞う天皇の姿を、新聞やテレビのニュース報道で繰り返し見たという記憶ばかりがある。平成という時代は、ながびいた景気停滞ばかりでなく、大災害が次々と襲った辛い時代であったと、将来にわたり回顧されることになるであろう。いまから10年前のこと、新入生が平成生まれと知ったときの違和感を覚えているが、その平成っ子たちも現在では、子育てに奮闘したり、出張で各地を駆け巡ったり、それぞれに充実した社会人生活を送っている様子がSNSを通じて伝わってくる。平成もやがて30年になるのだから当然といえば当然だ。

平塚キャンパスは平成元年に開設されているから、私たちの経営学部も、紛う方無き平成っ子である。開設年度末にははやくも、学部全教員と若干の研究者で構成した国際経営研究所が、その機関誌『国際経営フォーラム』を創刊している。巻頭言によれば、国際経営学とは「単なる経営学を超えた、人文・社会・自然すべての学問を包摂する学際的な領域として構想され」という。爾来、経営学部を支えてこられた各位の学術研究の一端は、本28号に並んだ論考にもみることができ。創設時の構想の実現に向けて研究所が確実に歩を進めつつあることを示すものといえよう。

昨年来、キャンパスの再編計画が一気に現実化している。国際関連の諸学部を新キャンパスに移転して集中させるという。あらたな元号のもとで私たちの研究所も新展開を迎えることがほぼ確実となっている。先の巻頭言が、「国際経営学の目指すものは狭義の経営学ではない。重点はむしろ国際にある」と断じていることからすれば、これも創設時の構想に沿った前進といってよいだろう。平成期に刊行する『国際経営フォーラム』も、残すところ1号となった今、研究所の来し方行く末に思いを馳せ、さらなる前進に向けて何をすべきか自問しなければなるまい。

編集委員長 泉水 英計